

ガイドスタッフによる文章での作品紹介

## 「つぶやきトーク」

コレクション展示室では、通常、毎日ガイドスタッフによるギャラリートークを実施しており、数多くのお客様にご参加いただいています。しかし、新型コロナウイルス感染拡大への対応のため、当面の間、対面でご案内するギャラリートークは休止しています。そこで、普段、作品解説を行っているガイドスタッフが「つぶやきトーク」と題し、展示室にある作品を文章で作品をご紹介します。今回は、「MOT コレクションコレクションを巻き戻す」後期 2021年3月20日(土)～2021年6月22日(火)※新型コロナウイルス感染症拡大防止のため3月20日～31日および4月25日～5月31日まで休室)に展示されていた作品の一部を作品画像とともにウェブサイト上でご紹介します。

ガイドスタッフのつぶやきから、作品の世界を広げていただければ幸いです。





川村清雄 《黄海大海戦》 1896年以前 油彩／カンヴァス 33×63 cm

力強く波を切って進む旧日本海軍の軍艦松島を描いたのが、旗本から西洋画家になった異色の画家、川村清雄です。幕府が瓦解したのち1871年から10年間にわたり、米国やフランス、イタリアへ留学し西洋画を学びました。帰国後は、幼い頃に習った日本画の知識を活かし、西洋画と日本画の手法の融合に取り組み、独特の画風を確立しました。

川村は「遅筆」で有名でした。あるとき仕事を仲介した勝海舟は絵が完成しないことに怒り、彼に切腹を迫ったと言われています。



ガイドスタッフF



石井林響 《童女の姿となりて》 1906 絹本彩色(一幅) 161.5 × 82.8 cm

美しい女性が、優雅に舞っている姿が描かれています。でも実はこの人物は女性ではなく、女装したヤマトタケルの姿なのです。

西の国を支配していたクマソタケル兄弟を討つため、女装して宴に紛れ込み、油断した兄弟を見事討ち取ったという神話を基にした作品です。一見穏やかに見える画面ですが、足元に置かれた短刀が、その後の血なまぐさい場面を暗示しています。

林響はこうした歴史画や伝統的な画題を多く描いていますが、この作品を描いたときは、わずか21歳。豊かな才能が垣間見える作品です。



ガイドスタッフO



村山槐多《樺》1917 鉛筆・木炭／紙 101×69.5cm

昔、東京の上野公園にあったケヤキ。枝の先端は描かれていませんが、黒い線がぐっと上に向かい、高さを感じさせます。つややかなどっしりとした幹は存在感たっぷり、枝が折れ曲がるほどの強い風にも耐え、びくともしない。

鉛筆と木炭でこの大きな絵を描いたのは、少年時代から文学や絵の才能を発揮してきた村山槐多。スペイン風邪にかかり、惜しくも22歳で亡くなりました。制作中は「直立不動全力をつくしてといった形で、眼前の素晴らしい巨木を凝視しては描いていた」といいます。この木が、まっすぐでひたむきな画家の姿にも見えてきませんか？



ガイドスタッフ N



清水登之《戦蹟》1937 油彩／カンヴァス 45.5 × 38cm

写実的な戦争画と異なりますが、攻撃され破壊された「戦蹟」が描かれています。作家の清水登之は1907年に単身渡米し働きながら絵を学び、カフェや労働者などを描いて評価を得ました。1924年にフランスに渡り、キュビズムなどの影響を受け、1927年に帰国。その後、従軍画家として中国などの戦線を訪れています。1階の別の展示室に、1923年に自身の妻子を描いた《親子像》が展示されていますので、この《戦蹟》との作風の違いを見比べてみてください。最愛の息子育夫が1945年戦死、絶筆《育夫像》を残して同年清水はこの世を去りました。



ガイドスタッフS



鹿子木孟郎 《大正12年9月1日》 n.d. 油彩／カンヴァス 156×204cm

大正12年9月1日、関東大震災が起きました。鹿子木孟郎は当時住んでいた京都から東京に入り、実際に見た被災地の様子を描いた《震災スケッチ》や、報道写真などを基にこの作品を描きました。堅実な画風のアカデミックな画家であった鹿子木のこのような行動の背景には、フランス留学中、歴史画家、ジャン＝ポール・ローランスの下で学んだことがあったと思われる。フランスでは伝統的に歴史画が最も格式の高い絵とされてきました。鹿子木は震災を聞き、日本の歴史の転換を予感し、それを描こうとしたのです。



ガイドスタッフ K

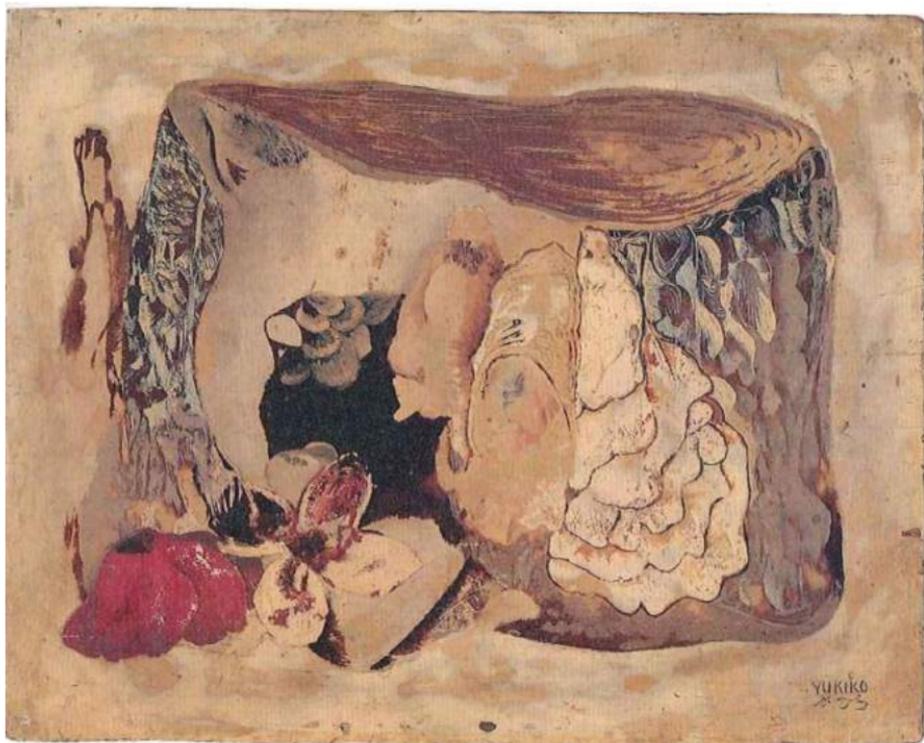


中原 實 《ヴィナスの誕生》 1924 油彩／カンヴァス 115×90cm

アメリカ留学後、フランスに渡り陸軍歯科医を務め、欧州各国に滞在し7年ぶりに帰国したのが1923年、医学者として日本に新しい歯科医学を持ち帰った一方で、精力的に絵筆をふるい、作品を発表します。世界の文化経済の中心であった当時のヨーロッパで彼が見つめた発展する工業都市、そこに暮らす人々、人類が初めて経験した世界大戦とやがて訪れる世界大恐慌の狭間の時代に中原が求めたヴィナスとはどんな存在だったのでしょうか。



ガイドスタッフO

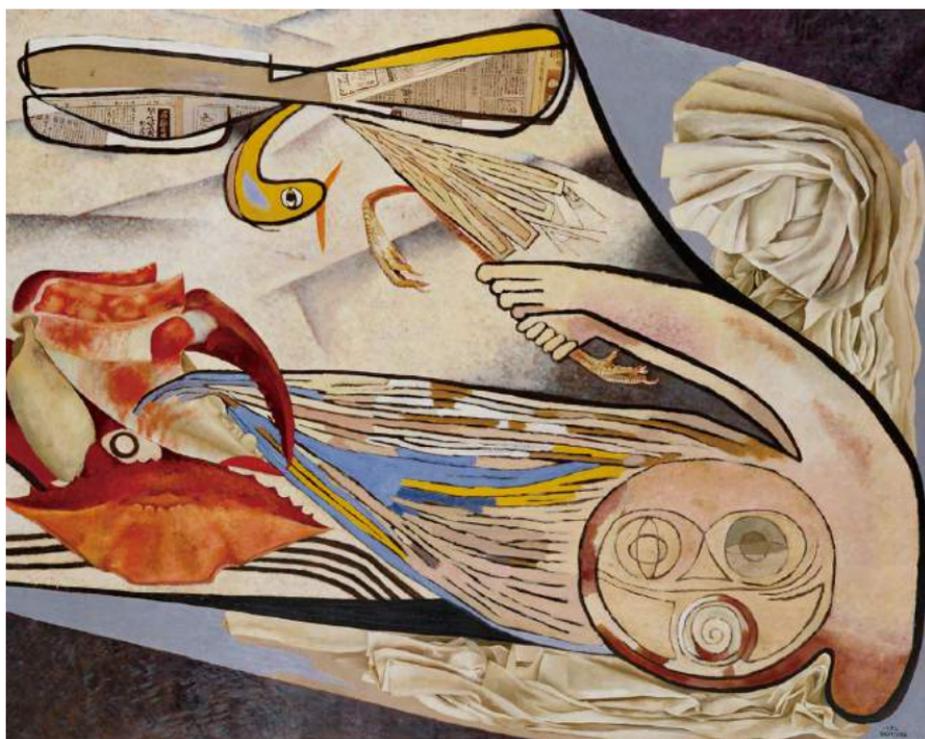


桂ゆき 《[切り株]》 1937 漆／板 21.7×27cm

第1室からここまでの作品を御覧になって、女性作家の不在に気付かれた方、お待たせしました！桂ゆきは、女性が芸術を志す事がまだ困難だった戦前から戦中、そして戦後と一度も止まる事なく活動が続けた、日本における女性芸術家のパイオニア的存在です。《[切り株]》は小さな作品ながら、当館の収蔵品の中で最も早い女性作家の作例という顔も持っています。桜の木の板に漆で描かれており、生キャラメルのような色合いは漆独特のもの。漆は樹液、樹の精です。それを切り株に戻してやるかのごとくに細密に描かれているのも面白いなあ、と思います。

ガイドスタッフ Y



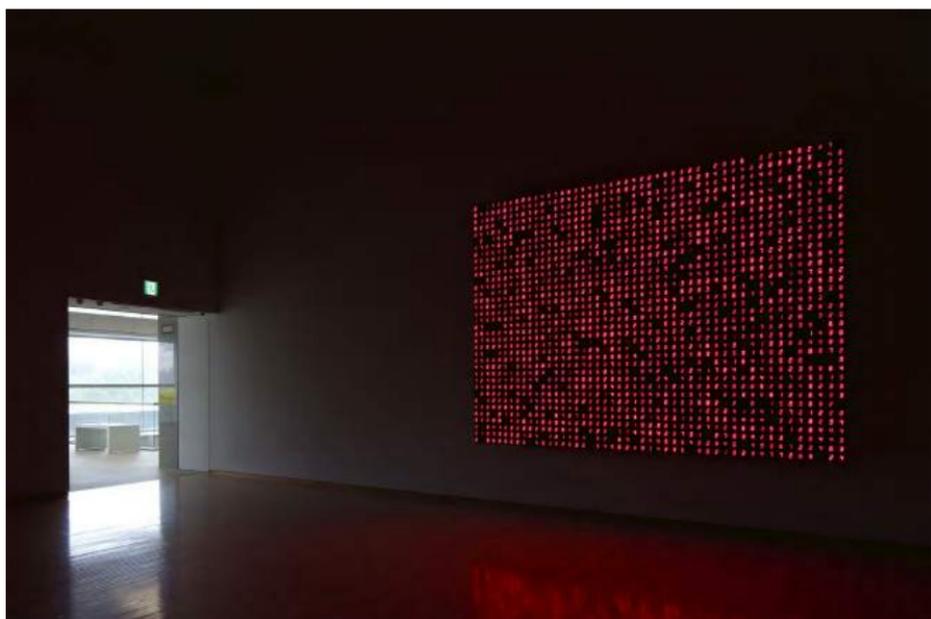


桂 ゆき 《抵抗》 1952 油彩／カンヴァス 130×162cmm

今回は2つの絵の見方をご案内します。まずはそのまま。赤いカニの爪の様なものに髪を引っ張られ、手は助けを求める様に鳥の脚にしがみついている人の顔が右下に。でも、その顔はどこか笑っているようにも見えます。次はくるっと時計回りに90度回転して見ます。左下にきた顔の表情はもっと追い詰められ叫んでいる様です。画面左上に描かれた新聞記事は1952年の破壊活動防止法成立の翌日のもので、これも桂ゆきの抵抗の1つの形でしょう。が、彼女が我々に仕掛けた自作の見方の可能性こそが、人間の固定観念に対する「抵抗」なのだと気付きます。

ガイドスタッフY





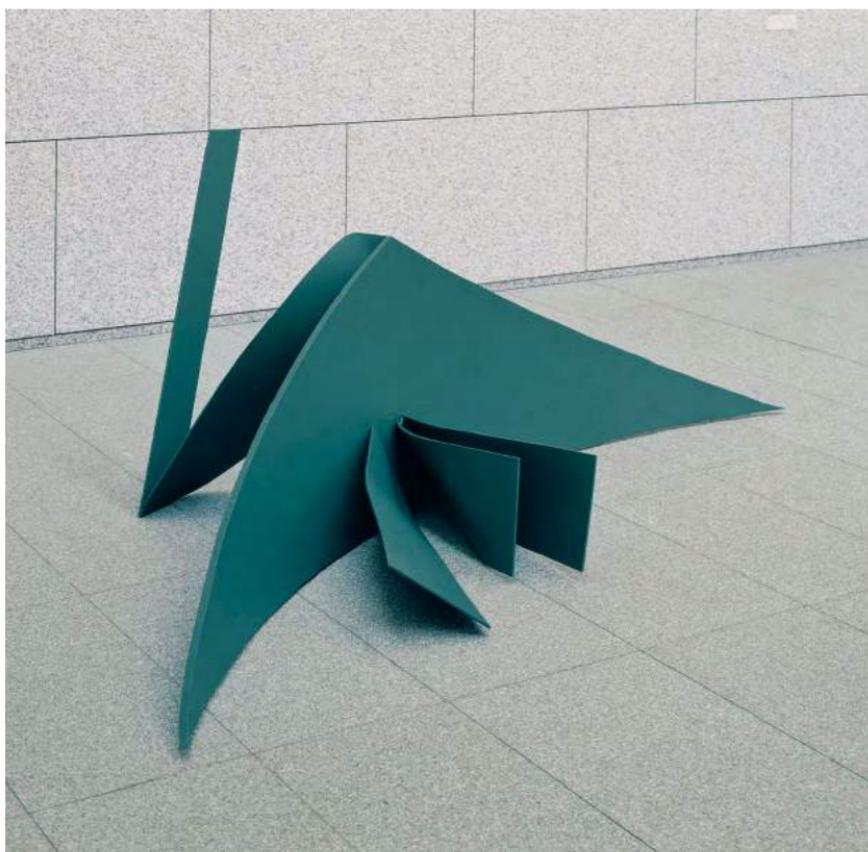
宮島達男

《それは変化し続ける それはあらゆるものとの関係をつなぐ それは永遠に続く》  
1998 赤色発光ダイオード(TIMED-R 1728 個)、集積回路、電気コード、基板、  
変圧器 384×288cm 撮影：木奥恵三

展示室内にある椅子に座って、作品をゆっくり眺めてみてください。数字のカウンターの集合体であるこの作品、1つ1つのカウンターを目で追っていくと、共通のプロセスを踏みながらも、それぞれの動き方のスピードや表示の明るさに違いがあることがわかります。独立した個の集合体から全体が成っているようです。個人的な見解ですが、タイトルの「それ」を人として置き換えてみると、人同士が繋がりがあい、個性が活かされる社会、その社会は瞬間瞬間で変化しつつ、輝き続けるということが作品で表現されているように見えてきます。



ガイドスタッフT



アンソニー・カロ 《シー・チェンジ》 1970 彩色した鋼 94×292×140cm

あ、きづいてくれました、この作品に。ありがとうございます。

木場公園の木々と呼応するかのような緑の物体。色や形・大きさから、どんな印象をもたれましたでしょうか。

あらためて、キャプションをご覧いただいてから作品を見ると、素材から想像される重さや、タイトルから浮かぶ情景に最初とは異なった印象を持たれる方もいらっしゃるかと思います。それもまた、この作品の魅力のひとつなのです。



ガイドスタッフ A



鈴木昭男 《道草のすすめ -「点 音(おとだて)」and “nozo mi”》 2018-19  
 コンクリート・プレート 撮影：木奥恵三

《点 音》は美術館内と敷地内に点在する12個の白くて丸いプレート。《no zo mi》は屋外展示場にある5つの階段状のもの。足とも耳とも見えるマークが目印。見つけたらたぶん乗ってみたいくなる、そんな作品です。美術館で作品に乗っていいの？ そう思われるかもしれませんが、子どもの頃、駐車場の車止めブロックのような地面から少し高いところについてみたいくなりませんでしたか？ そんな気持ちのまま、ぜひ《点 音》に乗って、耳を澄ましてみてください。

12の《点 音》の場所の地図もご用意しています。  
 手に入れて探検開始です！

ガイドスタッフY

